製作実習におけるPO学科－CN課程の多職種連携への取り組み

学院　義肢装具学科　中村喜彦　星野元訓　丸山貴之　徳井亜加根　野原耕平　小濱友恵
学院　脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程　佐藤雅子　堀岡美由紀

【はじめに】義肢装具学科（PO学科）における義肢の製作実習では、切断者にご協力いただき採型や適合の技術を学ぶが、装具については装具使用者の協力を得ることが困難なため学生同士で採型や適合を行っている。そのため、装具の知識がない人に対して使用目的などを説明する場面がないことや、麻痺を有する患者の採型・適合を行う機会がない等の課題があった。また、カリキュラムの中で「看護学」、「理学療法学」「作業療法学」などの講義により他の医療専門職の業務理解や多職種連携・チーム医療について学ぶが、製作実習において多職種と連携する授業は行っていなかった。そこで昨年度より、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程（CN課程）と連携して、脳卒中病棟の看護師である研修生に患者役として製作実習に参加してもらい、当学科学生に対し感想やアドバイスをフィードバックしてもらうプロジェクトに取り組み始めたので、その内容と成果について報告する。

【授業内容】学生１名と研修生３～４名で１グループとし、計６グループで実施した。各グループにおいて、脳卒中患者を模した研修生１名に対して学生がシューホーン型短下肢装具を製作し、採型・適合チェック・調整を行った。初対面から調整終了までの間、教官は指導を行わず進行や対応の判断を学生に委ねた。終了後、作業や患者とのコミュニケーション等における良かった点や課題、製作した装具の適合についてグループワークを行い、まとめとして発表を行った。

【結果】開始当初、学生は緊張した面持ちであったが、作業が進むにつれ会話も弾み言葉を選びながらコミュニケーションに努めていた。

グループワークでは学生に対する課題として、「作業の目的や時間などの説明がなく、また刃物を使うので不安だった」、「ギプスを外す際、重心次第ではバランスを崩しかねない。気を付けた方がよい」などの指摘が挙がった。多くの学生が普段授業で何気なく行っている作業が患者にどのような心理的・身体的影響を与えるのか改めて理解し、頻繁な声掛けの重要性も感じていた。また広い視野で患者本人に気を配る必要があることや、やさしく丁寧な対応が求められるといった気付きを得ていた。

研修生からの実習に対する感想では、皮膚トラブルを避けるため何度も調整する配慮に感動したことや、自分専用の装具の適合の良さに驚いたことなどの好評価が挙がり、学生のモチベーション向上に繋がった。また、「患者の気持ちの一部を体験できてよかった」、「装具を製作する患者に対し、看護師としてできる事前フォローがあると分かった」などの感想もあり、双方にとって有益な取り組みとなった。

【まとめ】製作実習においてCN課程と連携し、現役看護師である研修生から学生に対して感想やアドバイス等のフィードバックをもらった。学生は新たな気づきを得ると同時に、これまで学習

してきた内容の重要性を再認識していた。今後も継続して行う予定である。

装具を装着されて興味津々の研修生と、装着方法の説明や適合状態の確認で手一杯の学生

図１　装具の適合チェックの様子

和やかな雰囲気の中でグループワーク
アドバイスを一言も漏らすまいとメモを取る必死さも伺えた

図２　グループワークでの意見交換

最後は笑顔で記念撮影
双方にとって有益な取り組みとなった

図３　グループ発表を終えて